

神戸ツアーからみた日本の外国人居住地と 観光地の言語景観

林昱蓁

1. はじめに

神戸ツアーは、東海大学日本語文化学科が2009年から開始した夏期の国際交流活動である。その目的は、姉妹校である甲南大学の教職員や学生とともに、日本の神戸地域を対象として、その特別な地理的位置や移住してきた外国人住民の生活などについての理解を深めることである(出典:東海大学日本語と文化学科ホームページ)。2020年に新型コロナウイルスの感染拡大により神戸ツアーは中断されたが、2023年に再開されることになった。

筆者が神戸ツアーに参加したのは、再開後の2023年6月26日から2023年7月4日までである。交流活動のテーマは、「越境する移動と定住」という神戸・大阪の旅であった。換言すれば、再開後の交流活動では、神戸地域に加えて大阪においても調査と交流が行われた。本稿では、筆者が神戸ツアーに参加した際に神戸市内および大阪市生野区で撮影した写真をもとに、現地の言語景観の現状について分析を行う。

ただし、本調査において撮影した写真は神戸市内および大阪市生野区の地域全体に及ぶものではないため、一事例として捉えて分析を行うこととしたい。

2. 先行研究

磯野(2012)は、ソウル特別市にある東部仁村洞(市内で最も古い日本人集住地域)と、アメリカ人を中心とした多国籍の外国人が居住する梨泰院洞を対象に、言語景観の実態を分析した。また、ソウル特別市や釜山広域市など観光客の多い大通りと比較し、外国人居住地における言語景観に多民族社会の特徴が色濃く表れている点についても考察した。調査および分析では、「ひとつの看板に多言語表示が観察される」という、言語景観研究に共通する特徴が常に指摘されて

いる。

また、用語整理では次のように述べられている。「ハングルは文字であり、話し言葉を含む『韓国語』という意味では使用できない」(磯野 2012, p.194)ため、ハングルは「K」という記号で示されている。アルファベット表記に関しては、「アルファベット表記+英語」といった事例が多く観察されるため、英語およびアルファベット表記は「英語(E)」として分類されている。漢字という文字については、日本人、中国人、あるいは韓国人の誰に向けたものか不明な場合があるため、漢字が日本語(ひらがな・カタカナ)とともに用いられ、明らかに日本人向けの表記である場合は「日本語(J)」、それ以外は「漢字(Ka)」と分類された。その他、中国語(C)、ロシア語(R)、スペイン語(S)といった分類も存在する。

その結果、まず公共表示においては、公共交通機関(電車、バスなど)では他の地域と同様に「K・E・Ka」や「K・E・J・C」といった多言語表示が見られた。また、民間表示(店舗名、チラシ、看板など)では地域住民に配慮した言語表記が用いられ、多言語化が進んでいた。さらに、地域住民向けと思われる店舗や病院などでは、観光客の多い繁華街の言語景観と比べ、対象者が明確であることが示されている。最後に、言語景観に関する研究はこれまでも数多く行われてきたが、特色のある場所を対象に、「その言語景観が誰に向かって発信されているのか」「発信者は誰か」「どのような役割を担っているのか」といった視点からの研究、ならびに多民族化の視点からの調査は少ないことが指摘されている。

江(2009)は、多言語表示が目立つ銀座、表参道、新宿、秋葉原、門前仲町の繁華街において、すべての店名や広告看板などの私的表示を調査した。また、撮影した写真データを「地域」「業種」「言語種」「文字種」「表記法」の五つのカテゴリーに分類し、Correspondence Analysis(対応分析)という多変量解析手法を用いて分析を行った。

それによると、調査対象である五つの地域の言語景観は、日本志向型・西洋志向型・東洋志向型の三つのパターンに分類することができるという。その中で、銀座、新宿、門前仲町の言語景観は日本志向型に分類され、縦書きで表示され、主に日本語が使用されている。業種としては、建物の名称、事務所、飲食業が多く、経営者は主に日本人であると推測される。一方、表参道の言語景観は横書きで表示されており、西洋言語の使用が全体の約7割を占めている。業種としては、医療美容関係や芸術品関係が多く、西洋文化の影響を強く受けていることから、西洋志向型に

分類される。さらに、秋葉原の言語表示には、日本語、英語、中国語、韓国語による多言語表示が多く見られ、縦書きと横書きが併用されている。業種としては、電気製品販売店、漫画店、ゲームセンターなどの娯楽施設が多く、また、秋葉原を訪れる観光客は中国、韓国、台湾などの近隣諸国から来訪しているため、この地域の表示は、顧客の購買行動を促進するために意図的に工夫されていると推測される。

山川(2011)は、北海道倶知安町のリゾート地における言語景観を調査し、宿泊施設と居住地の機能分化によって生じる地域差を考察した。調査時期は2011年の冬季(1月25日～27日)と夏季(9月9日～10日)に、市街地の飲食店およびスキー場のメインストリート(以下、ヒラフ地区)において実施された。また、地域社会における言語の取り扱いやルールのあり方についても検討した。そして調査対象となった掲示物は、常設(広告看板)と臨時(立て看板や窓に貼られた掲示物)に分類され、自家用看板および交通標識は除外された。使用言語は、日本語、ローマ字(店舗名など)、英語、その他(中国語、韓国語など)に分類し、複数言語が表記されている場合には重複して統計が行われた。

その結果、冬季の市街地では、掲示物を設置していた店舗は49軒、看板数は160点であった。その中で、日本語が66.3%、ローマ字が11.9%、英語が18.8%を占めていた。多くの表記は店名であり、そのほか注意喚起や客を引き付けるための短文も見られた。英語表記に関しては、メニューに日本語と併記していることが多く、また、「welcome」や「CLOSE」などの接客語、「BAR」「HAIR SALON」のような業種を示す単語が用いられている。なお、夏季には、日本語のみの看板、日本語と英語による併記の看板が少し増加したが、全体的な変化は見られなかった。

冬季のヒラフ地区では、掲示物を設置している店舗および集合看板の総数は51点、看板の総数は225点であった。その中で、英語が50.6%、日本語が36.9%、その他が4.4%を占めていた。多くの表記は、店舗名や業種であった。英語表記について、ヒラフ地区における英語のみの表記が市街地より多い。さらに、不動産投資会社や移動販売車による多言語看板も確認されており、建物に貼られたメニューなどにも、英語を主とした表示、また、日本語との併記が見られた。

夏季のヒラフ地区は冬季とは大きく異なっており、その背景には2つの要因があると山川は指摘している。第一に、2011年の東日本大震災および原発事故により、外国人観光客の帰国や店舗の廃業が相次いだことである。第二に、看板が顧客のニーズに応じて作成されるため、臨時看

板の数が減少し、英語と日本語の表記の件数も減ったことである。これらの結果から、スキーシーンが当地の言語景観に大きな影響を与えていることが明らかになった。さらに、山川は、ヒラフ地区において英語表記が日本語表記を上回る現象について、顧客を引き付けることを目的とした看板の無秩序な設置が景観の悪化を招く懸念があると指摘している。

以上の先行研究から、磯野(2012)は多民族化の視点に基づいて、外国人居住者が多い地域および観光客が多い地域における言語景観の実態を分析し、江(2009)は多変量解析手法を用いて東京における繁華街の多言語表示について調査した。また、山川(2011)は観光地の言語景観がもたらす影響と、それに伴う社会的課題について検討した。これらに共通するのは、日本における観光地や外国人集住地域、すなわち多言語表示が顕著に見られる場を対象とし、言語景観の観察、分析を行っている点である。

本稿の「はじめに」に述べたとおり、筆者が参加したツアーでは、神戸市内および大阪市生野区を訪問した。これらの地域も外国人居住者や観光客が多く見かける場所である。したがって、本稿ではこれからの先行研究で用いられた分析視点を参考にしつつ、日本語学習者である筆者が観察した言語景観について、言語別およびその性質(公共表示か民間表示か)を分類し、考察を行う。

3. 調査概要

筆者が参加した神戸ツアーの日程表は、表1に示すとおりである。なお、この表は、「111年度神戸大阪之旅:越境移動與定居執行成果報告書」(p.33)をもとに、筆者が一部修正を加えたものである。

表1 神戸ツアーの日程表

日付	日程
6/26(月)	関西空港
6/27(火)	諏訪神社、関帝廟、中華民国留日神戸華僑総会、中華会館
6/28(水)	宝塚大劇場、大阪大学
6/29(木)	大阪生野区(コリアタウンと歴史資料館)

6/30 (金)	神戸華僑歴史博物館、孫文記念館、新開地
7/1 (土)	北野異人館、海外移住と文化の交流センター
7/2 (日)	カトリック鷹取教会、外国人居留地、神戸港
7/3 (月)	関西学院大学、甲南大学
7/4 (火)	関西大学、大阪中華学校
7/5 (水)	帰国

3.1 分析対象

神戸ツアーは 2023 年 6 月 26 日から 2023 年 7 月 5 日までの日程で実施された。本稿で主に分析対象としたのは、以下のところで撮影された、合計 107 枚の写真である。

- 諏訪神社、関帝廟および中華会館へ向かう途中で撮影した写真:6 枚
- 大阪市生野区のコリアンタウンと新今里で撮影した写真:65 枚
- 神戸・新開地商店街で撮影した写真:9 枚
- 生田神社・北野異人館街・海外移住と文化の交流センターで撮影した写真:13 枚
- 神戸の鷹取教会と神戸港で撮影した写真:14 枚

3.2 調査地

調査地の紹介に先立ち、日本における外国人観光客数および、筆者が見学した地域における在留外国人数について概観する。

2019 年、すなわちコロナ禍が発生する以前に訪日した外国人旅行者数を国別に見ると、上位 4 か国はすべてアジア地域であり、最多は中国(9,594,394 人)、次いで韓国(5,584,597 人)、台湾(4,890,602 人)、香港(2,290,792 人)であった。また、2020 年から 2024 年にかけては、国別の順位に多少の変動が見られるが、常に上位 3 か国には韓国、中国、台湾が含まれている(出典:日本政府観光局ホームページ)。

一方、2022 年における大阪市の在住外国人の国籍別内訳を見ると、最多は韓国籍(57,019 人)、次いで中国籍(39,703 人)、ベトナム籍(22,570 人)である。また、神戸市でも同年、韓国籍(14,557 人)、中国籍(13,301 人)、ベトナム籍(8,210 人)の順で多く在留している(出典:大阪府および兵庫

県ホームページ)。以上のことから、筆者が見学した地域における言語表示には、中国語、韓国語、ベトナム語が多く含まれると予測される。

以下の内容は、「111 年度神戸大阪之旅:越境移動與定居執行成果報告書」(pp.33-38)および、それぞれの場所を紹介する公式ホームページをもとに、筆者が整理し、まとめたものである。

(1)諏訪神社

諏訪神社は稲荷神を祀っており、商売繁盛や健康長寿のご利益があることで知られている。氏子だけでなく神戸在住の外国人、特に中国人の崇敬者が少なくない。境内には、中国式の偏額が奉納されて、中国式の参拝道具も備えられている(出典:報告書 p.33、諏訪神社ホームページ)。

(2)大阪生野区

生野区の人口は 127,666 人(令和 6 年 12 月 1 日現在)であり、そのうち在留外国人数は 29,531 人と、大阪市の行政区の中で最も多い。その内訳は、韓国・朝鮮籍が 18,179 人で最も多く、次いで中国籍が 3,802 人、ベトナム籍が 3,744 人となっている(出典:大阪市ホームページ)。特に鶴橋地域には、コリアタウンが形成されており、韓国系の商業ビルも立ち並んでいる(出典:報告書 p.34)。

(3)大阪コリアタウン(歴史資料館)

鶴橋駅周辺や生野コリアタウンは、多くの観光客で賑わっている。この地域は韓流文化の中心地であるとともに、韓半島との歴史的なつながりも深く、現在では多文化共生社会へと発展している。近年では、大阪コリアタウン歴史資料館が設立され、この地域の歴史を振り返る場ともなっている(出典:報告書 p.34、大阪コリアンタウン歴史資料館ホームページ)。

(4)新開地

明治 29 年、湊川で洪水が発生し、翌年から付け替え工事が始まった。その後、1905 年に新開地が誕生し、最盛期には 24 館の劇場や商業施設が集まり、約 40 年間にわたり神戸の商業中心地として栄えた。しかし、昭和 30 年代以降、都市機能の中枢が三宮へ移るにつれ、映画館や劇場の閉鎖が相次ぎ、来訪者も減少したことで、次第に活気を失っていった。

昭和 59 年には、地域の町会が「新開地周辺地区まちづくり協議会」を設立した。1997 年には「まちづくりスクエア」、1999 年には「新開地まちづくり NPO」が設立され、現在の新開地は多彩な文化が息づく興行街として再評価されている(出典:報告書 p35、新開地ファンホームページ)。

なお、神戸市の在留外国人数は2010年に44,312人であり、年々増加して2023年には55,421人に達している。国籍別では、韓国・朝鮮、中国、ベトナムの順に多い。特に新開地のある兵庫区では、2023年12月末時点で在留外国人数が7,541人、そのうち、中国籍が2,031人、ベトナム籍が2,003人、韓国・朝鮮籍が1,215人となっている(出典:兵庫県庁ホームページ)。このような背景から、新開地の街並みにも多言語表示が見られる。

(5) 北野異人館街

北野異人館街は、六甲山の麓に位置し、神戸港にも近い。1868年の神戸港開港に伴い、外国人居留地が設けられ、多くの洋風建築が建てられた。「異人館街」という名称は、当時の日本人が外国人を「異人」と呼んでいたことに由来し、そのため外国人の住む街として名付けられた。このエリアは神戸旧居留地の北側に位置し、神戸大空襲を免れたことから、戦前の街並みの面影を色濃く残している。現在も外国人住宅や旧領事館などが保存され、和風建築と洋風建築が共存する異国情緒あふれる街並みが観光客を惹きつけている。なかでも、風見鶏の館(旧トーマス住宅)が特に有名であり、美術館や博物館、グルメスポットも充実していることから、神戸観光の主要スポットの一つとなっている(出典:報告書 p.36、神戸北野異人館街ホームページ)。

(6) 海外移住と文化の交流センター

海外移住と文化の交流センターは、1928年に設立された国立移民収容所を前身とし、その後「神戸移住教養所」、「外務省神戸移住幹旋所」、「神戸移住センター」と名称を変遷してきた。戦時中は軍の施設として利用され、戦後は看護婦養成機関となった。現在の建物は、1階と2階に「移住ミュージアム」が設置され、移住の歴史を伝えている。また、3階には「多文化との共生の広場」と「芸術を生かした創生の広場」がある。「多文化との共生の広場」には情報資料室やセミナールームなどが整備され、在住外国人に対する支援を行っている。「芸術を生かした創生の広場」にはアトリエやギャラリースペースが設けられている(出典:報告書 p.36、海外移住と文化の交流セ

ンターホームページ)。

(7) カトリック鷹取教会

神戸市長田区に所在するカトリック鷹取教会は、1927年に聖堂が建設されたが、1995年の阪神・淡路大震災によって全焼した。震災後、教会は地域の救援拠点として機能し、多くのボランティアが集まった。同年9月には、建築家・坂茂氏の設計による紙管を用いた仮設聖堂「ペーパードームたかとり」が完成し、復興のシンボルとなった。その後、2005年に「カトリックたかとり教会」と改称され、2007年には新たな聖堂が再建された。現在、建物内には「たかとりコミュニティセンター(TCC)」が併設されている。

また、1975年頃からベトナム戦争の影響により、多くのベトナム人が国外へ移住し、日本でも1978年以降、インドシナ難民の受け入れが開始された。兵庫県庁ホームページの公表によれば、兵庫県長田区には1980年代前半からベトナム人の定住が見られるようになり、2010年には約862人だったベトナム人人口は、2023年には3,568人に増加している。現在、カトリック鷹取教会はベトナム人信者にとって信仰と交流の拠点となっており、教会ではベトナム語によるミサも行われている(出典:報告書 p.36、神戸バイブルハウスホームページ)。

(8) 神戸港

神戸港は、古代から中世にかけて交易の拠点として発展し、1868年の開港以来、日本の主要な国際貿易港として役割を担っている。地理的には日本列島の中心に位置し、北米、欧州、豪州、アジア、中国を結ぶ国際定期航路が整備されている。また、西日本の各港との内航航路網も発達している。さらに、クルーズ客船の誘致やウォーターフロントの整備にも積極的に取り組んでいる(出典:報告書 p.38、神戸市役所ホームページ)

3.3 分析方法

以下では、言語景観の定義および、本研究で使用する記号について説明する。

まず、本稿でいう言語景観は、磯野(2020)の定義に従うものである。磯野(2020)によれば、言語景観は「公共表示」と「民間表示」に大別される。公共表示とは、商業目的を含まない公共施設

に設置されている表示物であり、例えば空港や駅、道路などに見られるものである。これに対し、民間表示は商業目的のものであり、主に街中にある商業店舗や企業の広告などが該当する。いずれにせよ、言語景観の対象には、看板、ポスター、掲示物、のぼりなどが含まれる。

次に、磯野(2012)が指摘しているように、一つの看板には多言語表記が頻繁に見られる。本研究では、看板等の言語表示を分析するにあたり、磯野(2012)において使われる記号を参考しつつ、次のように分類記号を用いる。

日本語(ひらがな、カタカナ、漢字を含む)の表記は、「J(Japan)」として分類する。英語表記は「E(English)」、韓国語は「K(Korean)」と示す。また、中国語の表記については、磯野(2012)では中国語「C(Chinese)」と一括して示されているが、中国語には繁体字と簡体字という異なる文字体系が存在する。そこで、本研究では繁体字中国語を「繁」、簡体字中国語を「簡」として区別する。さらに、その他の言語については、ベトナム語を「V(Vietnamese)」、スペイン語を「S(Spanish)」、フィリピンのタガログ語を「T(Tagalog)」として分類し、記号化する。

4. 調査の結果と考察

本節では、見学日程の順番に観察した言語景観について分析する。まず、2023年6月27日に諏訪神社へ向かう途中で撮影した6枚の写真のうち、公共表示は4枚、民間表示は2枚(そのうち、1枚はあるビル内のテナント案内板)である。公共表示には「J・E」、あるいは、「J・E・K・簡」といった2種類の表記が見られる。特に留意すべき点として、諏訪神社へ向かう途中にある案内図や道しるべの多くが、「J・E・K・簡」による多言語表記となっていることが挙げられる(図1)。

一方、民間表示にあたる看板群は商業目的で設置されたものであり、テナント案内板には「J・E」、「簡」、「E」、「J」などの表記が見られる。

なお、諏訪神社には前章で述べたとおり、中国式の匾額が存在する。そして、その匾額に記載されている文字は「繁」によるものとなっている(図2)。



図 1 街案内図



図 2 諏訪神社にある匾額

2023 年 6 月 29 日に大阪市生野区のコリアンタウンおよび新今里で撮影した言語景観の写真は 65 枚あり、以下の表 2(公共表示)および表 3(民間表示)は、それらの言語表示を分類、集計して作成したものである。

表 2 公共表示

言語表示		数量
4 言語以上	「J・E・K・簡・V」	2
	「J・E・K・簡」	5
3 言語	「E・簡・V」	1
	「J・E・簡」	1
2 言語	「J・E」	1
	「J・K」	6
	「J・簡」	2
	「J・V」	1
1 言語	「J」	8
	「V」	5

表 3 民間表示

言語表示		数量
4 言語	「J・E・K・簡」	1
3 言語	「J・K・簡」	3
	「J・E・K」	1
2 言語	「J・E」	3
	「J・K」	6
	「J・簡」	2
	「J・V」	6
	「E・K」	1
	「E・V」	2
1 言語	「J」	6
	「V」	2

もう少しこの地域における公共表示を説明すると、避難情報や注意喚起には 32 枚の写真が含まれており、「J・E・K・簡・V」、「J・E・K・簡」、「E・簡・V」、「J・E・簡」など、3 言語以上による多言語表示が見られる(図 3、図 4)。また、「J・E」、「J・K」、「J・簡」、「J・V」など、日本語に加えて英語、韓国語、簡体字中国語ないしベトナム語との 2 言語による表示(図 5)があれば、「J」、「V」のように 1 言語のみの表示(図 6)も観察された。



図 3 街にある注意事項



図 4 避難表示



図 5 公園にある張り紙

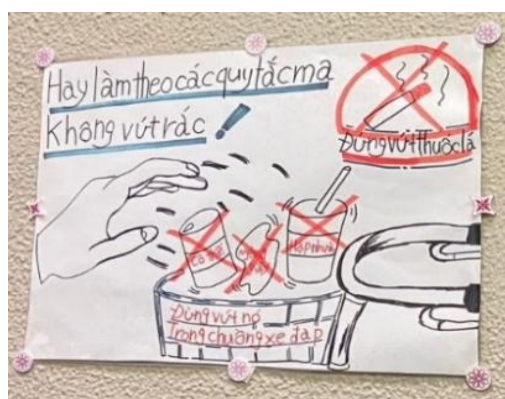


図 6 ゴミ捨てに関する注意事項

そして大阪市生野区のコリアンタウンおよび新今里における民間表示に分類される看板、ポスター、チラシなどの写真(図 7、図 8)は 33 枚あり、「J・E・K・簡」、「J・K・簡」、「J・E・K」など、3 言語または 4 言語による多言語表示が確認された。他にも、「J・E」、「J・K」、「J・簡」、「J・V」などの 2 言

語による表示や、「E・K」、「E・V」のように英語と他言語の組み合わせも見られた。さらに、「J」や「V」のように 1 言語のみの表示も確認された。



図 7 中華料理の看板



図 8 ベトナム商店看板

生野区のコリアンタウン周辺で撮影した公共表示のうち、注意喚起に関するポスターは 17 枚と全体の半数以上を占めており、その多くは多言語表記であるものの、掲示板などの生活に関するインフォメーションはほとんどが日本語のみで記されている。この点から、注意喚起のような情報は多言語で提供されている一方で、生活に役立つ案内などが十分に多言語化されていない可能性が示唆される。また、注意喚起の表示が目立つことにより、外国人住民や観光客が受ける印象についても今後検討すべき視点である。なぜなら、場合によっては排他的に受け取られるかもしれないためである。

ただし、「はじめに」にも示したように、本調査は街全体を網羅しているわけではなく、写真データに基づく初期的な観察である。そのため、上述した考察はあくまで仮説的なものである。今後、より広範な調査や当事者への聞き取り調査を通じて、外国人が言語景観(言語表示)に対するイメージについてさらに詳細に検討する必要がある。

2023 年 6 月 30 日には、神戸新開地商店街へ向かう途中で撮影した言語景観の写真は 9 枚あり、そのうち公共表示に分類される町や駅の案内図、公衆電話は 6 枚を占めていた。これらの公共表示には「J・E・K・簡」という 4 言語による多言語表示(図 9)や「J・E」のような 2 言語表示が確認された。

一方、該当地域における民間表示にあたる看板や店舗名、チラシの写真は 3 枚であり、これらには「J・E・K・簡・V」の 5 言語による多言語表示が見られたほか、「J・E」の 2 言語による表示も見られた。特に、図 10 のような店舗名における多言語表示は、前章で述べた神戸市における外国人人口の構成、ベトナム人移住者の増加を反映している可能性があると考えられる。



図 9 公衆電話



図 10 スーパーの店舗名

続いて、2023 年 7 月 1 日には、北野異人館街および、海外移住と文化の交流センターへ向かう途中で観察した言語景観として、13 枚の写真を撮影した。そのうち、公共表示に分類される地図、バス停時刻表、避難情報、建物紹介などは 10 枚を占めており、基本的に「J・E・K・簡・繁」の 5 言語による多言語表示が確認された(図 11)。また、「J・E」の 2 言語による表示も一部に見られた。一方、民間表示にあたる店舗のチラシや顧客アンケート用紙などは 3 枚であり、これらには「J・E・繁・簡・K」、あるいは「J・E・K・簡」といった 4 言語以上による多言語表示(図 12)が確認された。また、「J・E」の 2 言語表示も観察された。



図 11 バス停時刻表

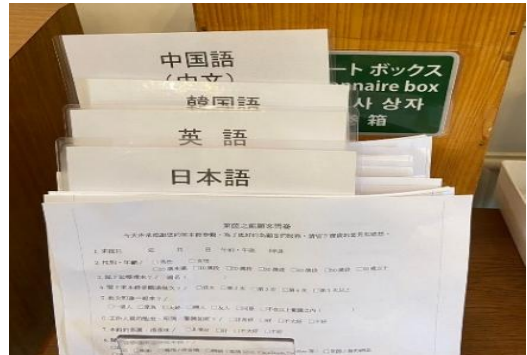


図 12 顧客アンケート用紙

2023年7月2日には、神戸市のカトリック鷹取教会および神戸港を訪れ、言語景観として14枚の写真を撮影した。そのうち、公共表示に分類される案内図や注意喚起の表示は11枚であり、基本的には「J・E・K・簡」の4言語による多言語表示が確認された(図13)。一方、民間表示にあたる店舗名や横断幕などの写真は3枚であり、「J・E」、「E」、「簡」といった2言語または1言語での表示が見られた(図14)。



図13 神戸港の案内図



図14 店舗名・横断幕

特筆すべきは、カトリック鷹取教会およびその周辺における多言語表示の実態である。前章で述べたように、長田区では近年ベトナム人移住者が増加しており、カトリック鷹取教会にもベトナム人信者が少なくない。教会の近くに設置されたゴミ出しに関する看板には、「J・E・K・簡・V」の5言語による表示(図15)があり、「J・V」の2言語による注意事項(図16)も確認された。

また、教会内ではさらに多様な言語による表示が見られた。例えば、トイレに貼られた注意喚起の掲示物には「J・E・K・簡・V・S」の6言語表示(図17)が確認され、さらに教会でのマナーを示す掲示物には「J・E・K・簡・V・S・T」と、ガログ語およびスペイン語を加えた7言語表示(図18)が見られた。このように、スペイン語やタガログ語が追加されている点は、これらの国におけるカトリック信仰の広がりを背景とした、宗教的・文化的配慮による対応であると推測される。ただし、すべての掲示物が同一の言語種類で表示されているわけではない点については、今後、教会関係者へ

の聞き取り調査などを通じて、実際の言語選定の方針や背景を明らかにする必要がある。



図 15 ゴミの出し方



図 16 注意事項



図 17 トイレにある注意事項



図 18 教会でのマナー

以上のように、今回の神戸ツアーにおいて撮影した写真および観察した現状から、大阪と神戸の一部地域における公共表示に使用されている言語は、主に日本語、英語、簡体字中国語、韓国語の4言語であることが分かった。これは、英語が国際共通語であることに加え、前章で言及し

た日本政府観光局の調査結果に基づき、日本を訪れる観光客の多くが韓国、中国、台湾、香港などアジア地域から来訪していること、さらに調査対象地域には韓国・朝鮮人や中国人、ベトナム人の在住外国人が一定数存在することが背景にあると考えられる。

民間表示においては、地域によって使用言語に若干の違いが見られた。例えば、大阪市の新今里地域では、韓国料理店や中華料理店が多く立地していることに加え、近年ベトナムからの移住者も増加していることから、店舗の看板やメニューには日本語に加えて韓国語、中国語、ベトナム語の表記が多く見られた。一方、それ以外の地域では、日本語と英語による表示が主流である傾向が確認された。

特に注目すべき点として、公共表示における注意喚起の内容が挙げられる。前章でも述べたように、ベトナムからの移民や労働者が存在し、大阪市生野区および神戸市の長田区・兵庫区では、商店や店舗の看板、ポスターにベトナム語による表記が見られた。一方で、街中で観察したポスターには、「ゴミ捨て注意」や「駐輪禁止」など、注意喚起に関する内容が多数を占めており、生活情報を提供する表示は比較的少ないことが分かった。

こうした言語景観は、観光客や在住外国人が地域の生活秩序を乱すことを未然に防ぐための対策なのかという疑問が生じる。注意喚起に多言語表記が用いられることが、彼らに対して不快感を与える可能性があるかについては、現時点では十分な検証ができず、今後の課題として残されている。今後は、日本における言語景観に関する先行研究を参照しつつ、調査対象地域の実態をより多角的に考察したい。さらに、アンケート調査や聞き取り調査を通して、外国人住民の視点をより深く理解し、言語景観の実態を分析していきたい。

5. 終わりに

本稿では、神戸ツアーを通じて神戸市内および大阪市生野区で撮影した写真をもとに、現地の言語景観の現状を分析した。本プロジェクトの目的は、日本の神戸および大阪地域に移住した外国人住民の背景とその生活実態を理解することにあった。

今回の神戸ツアーでは、実際に街を歩きながら掲示物などを観察することで、言語景観が地域の人口構成を反映しているだけでなく、その背後にある社会的課題についても多くの示唆を与えてくれるものであることに気づかされた。

一方、台湾でも近年は政策の影響により、海外から移住してきた外国人が年々増加しており、社会地域における言語景観の変化が進みつつある。今後は、日本と台湾の言語景観を比較し、両国における言語景観にどのような共通点、相違点があるかについても明らかにしたい。

(林昱蓁 リン イクシン 東海大学日本語文化学系)

参考文献

磯野英治(2012)「言語景観から読み解く多民族社会—ソウル特別市における外国人居住地域からの分析—」『日本語研究』第 32 号、pp.191-205。

———(2020)「言語景観から学ぶ日本語」大修館書店。

大阪コリアンタウン歴史資料館、<https://oktmuseum.or.jp/>、(最終閲覧日:2025 年 4 月 12 日)。

大阪市「大阪市の外国人住民数等統計＜大阪市外国籍住民国籍別区別人員数＞」、
<https://www.city.osaka.lg.jp/shimin/page/0000431477.html>、(最終閲覧日:2025 年 4 月 12 日)。

大阪府「府内在留外国人数(旧外国人登録者数)＜府内の在留外国人数上位 10 か国・地域の市町村別在留外国人数＞」、
<https://www.pref.osaka.lg.jp/o070090/kanko/tourokusyasuu30/index.html>、(最終閲覧日:2025 年 4 月 15 日)。

海外移住と文化の交流センター「建物の歴史」、<https://www.kobe-center.jp/history.html>、
(最終閲覧日:2025 年 4 月 12 日)。

江源(2009)「言語景観研究の現状について」『明海日本語』第 14 号、pp.67-75。

神戸北野異人館街「神戸北野ヒストリー」、<https://www.kobejinkan.com/history>、(最終閲覧日:2025 年 4 月 12 日)。

神戸市役所「神戸港＜神戸港の歴史＞」、
<https://www.city.kobe.lg.jp/3/0032.html>、(最終閲覧日:2025 年 4 月 12 日)。

神戸バイブルハウス「会員教会を訪ねて＜カトリックたかとり教会＞」、
<https://kbh-bible.jp/archives/2254>、(最終閲覧日:2025 年 4 月 12 日)。

『多元文化交流』第 17 号(2025 年 6 月)
〈実践報告〉

新開地ファン「新開地のまちづくり」、<https://shinkaichi.or.jp/history/>、(最終閲覧日:
2025 年 4 月 12 日)。

諏訪神社、<https://www.hyogo-jinjacho.com/data/6301047.html>、(最終閲覧日:2025 年 4 月
12 日)。

東海大学日本語文化学系(2023)「神戸大阪之旅:越境移動與定居執行成果報告書」、
<https://nihongo.thu.edu.tw/intexchange/2023%e7%a5%9e%e6%88%b6%e5%ad%b8%e7%bf%92%e4%b9%8b%e6%97%85%e4%ba%a4%e6%b5%81%e6%b4%bb%e5%8b%95/>、(最終閲覧日:2025 年 4
月 11 日)。

日本政府観光局「訪日外客統計<国籍/月別訪日外客数>」、
<https://www.jnto.go.jp/statistics/data/visitors-statistics/>、(最終閲覧日:2025 年 4 月 15
日)。

兵庫県庁「県内在留外国人数一覧」、https://web.pref.hyogo.lg.jp/sr13/ie12_000000010.html、
(最終閲覧日:2025 年 3 月 12 日)。

山川和彦(2011)「北海道倶知安町の言語景観と地域ルールについて」『麗澤大学紀要』第 93 卷、
pp.137-156。